

## 「求めよ、さらば与えられん」

小川 清

公益社団法人日本診療放射線技師会 副会長



表題は、信仰の主体的決断を説いたイエスの言葉〔マタイ福音書七章〕である。与えられるのを待つのではなく、何事にも自分から求める積極的な姿勢が必要であることをいう。自分は何を求めているのだろうか。求めて実際に行動したのだろうか。得られるように努力しているのだろうか。求めなければ得られないものがたくさんある。

10年以上前、全国診療放射線技師総合学術大会（以下、本大会とする）が開かれた会場の端で、役員の方々のつぶやきを耳にした。「技師の発表は、この程度でいいのではないか」「そうですね、良くなってきましたね」・・・「えー本当にいいのか？ もっと求めないの？」。結論がない発表や、研究とはいえない内容の発表が少しずつ減ってきて、確かに年々内容が良くなってきたことは事実だが、まだまだ学会発表とは縁遠いような研究発表が見受けられた。そして会員の中にも、職能団体の学術発表とはどのようなもので、何を求めるのかということが分かっていない発表が多かったような気がした。

本大会は、昭和60年のX線発見90周年を機に「全国放射線技師総合学術大会」として学術大会が始まった。そして日常業務に直結した学術研究の場として、また常に医療の原点である「患者さまへの思いやり」を再認識する場として引き継がれ、その後、名称を「日本診療放射線技師学術大会」に変更し、29回目の開催を控え会員の間に定着してきた。本大会では、医療安全・診療報酬などの職能団体として必須な業務シンポジウム、関連学会・研究会・分科会などの活動シンポジウム、モーニング・リフレッシュ・フレッシューズセミナーなどの教育研修に関する内容、また研究発表に関する統計や英語プレゼンテーションなども用意している。その中で現在、医療の根幹である「医療安全」、われわれ診療放射線技師の重要な業務である「医療被ばく」に関しては、地域の学術大会の研修会を含めて全会員に出席を義務付け、そして何らかのインセンティブを与えるべきと考えている。

再掲するが、本大会の主な開催趣旨は、日常業務に直結した学術研究の場と、患者が中心にいる医療の場の再認識である。本来、学会での研究発表はオリジナリティー（独創性）を求めるが、本大会は必ずしも独創性は求めておらず、日常の業務で遭遇し業務改善した事例を発表していただく「改善学術大会」と位置付けている。日常の業務改善を検討した事例について学術的、論理的に発表してほしい。昔「技術」は手段・方法だから研究の対象とはならないといわれていたが、テクノロジー（技術）は急速な進歩・発展を遂げ、放射線技術は応用技術として確固たるポジションを築いた。皆さまのお力で「改善」をより論理的な発表にして、さらに論文化をお願いし、診療放射線技師業務を社会からより評価されるようにしてほしい。

本大会では、メインテーマを「国民・医療者と協働し、質の高い医療を提供しよう」とし、サブテーマを「神業が魅せる術<sup>わざ</sup>」とさせていただいた。ぜひとも島根県松江市にお集まりいただきたい。お待ちしております。

「求めて松江に行こう」